



事業モニタリングで訪れたハク地区

— 住民理解の変化と課題

みなさんこんにちは！国際赤十字・赤新月社連盟（以下、IFRC）パプアニューギニア国事務所に派遣されている木本です！

事業モニタリング評価の2日目には、ブーゲンビル自治州のハク地区を訪問しました。

若者にフォーカスした気候変動適応に関する研修に参加した住民への聞き取りを行いました。

ブーゲンビル自治州は紛争の歴史を持つ地域で、その記憶は今も社会の中に残っています。

また同時に、海に囲まれた地域として、高潮や洪水、干ばつなど気候変動の影響を日常的に受けています。

今回の訪問では、住民の理解の変化、支部が抱える課題、そして今後の方向性が見えてきました。

研修参加者の意識の変化

パプアニューギニア赤十字社の研修をうけた参加者は、研修前は「気候変動という言葉の意味を知っている程度だった」と振り返りました。小学校レベルの知識はあったものの、自分たちの生活との具体的な結びつきは弱かったといいます。

研修後は、海・雨・洪水・熱波といった身近な現象と気候変動を結びつけて考えられるようになったと話してくれました。



集落の様子



集落の様子

研修後には地域での清掃活動が始まり、環境や海洋汚染について学んだ内容を住民同士で共有する姿も見られたそうです。

ただ住民の多くは、まだ始まったばかりだという意識で、継続できる仕組みが必要だと感じていました。

研修については、理論だけでなく実践的な内容が必要だということ、一度きりでは十分でなくフォローアップが欠かせないということが、繰り返し出てきました。

また、森林伐採が続く現状や、生計との兼ね合いから行動を変えにくいという点も課題として挙がりました。識字率や教育レベルの違いで研修内容を理解しづらかった参加者もいたということで、視覚的な教材の活用や、より実践的な学びへの改善を求める声もありました。



グループディスカッション



支部職員アイダさんの取り組み

パプアニューギニア赤十字社ブーゲンビル支部職員のアイダさんは、もともと学校の先生でした。2007年に教職を退き、2008年から赤十字ボランティアとして活動を始め、2009年には支部長を、2017年から現在の職を担っています。

支部では、事業の調整やボランティアとの連携、パートナーとの協働を担っています。国レベルの窓口としての役割も持ち、ボランティア向け研修や災害関連トレーニングを実施しています。

これまでの主な取り組みとして挙げられたのが、Evidence based Community-based Health and First Aid in Action（以下、eCBHFA）です。eCBHFAは、地域の人びと自身が健康課題を整理し、行動変容につなげるための研修プログラムです。アイダさんは紛争の影響で暴力が課題となる地域を優先し、3年間で約40～50回のトレーニングを実施してきました。

アイダさんは、今後は救急法の普及だけでは不十分だと感じています。

ブーゲンビル危機の記憶は今も地域に残っています。暴力や性的被害の経験がトラウマとなっている人が少なくなく、被害者だけでなく、加害に関わった側も葛藤を抱えているといいます。

「心のケアが必要です」

MHPSS（心理社会的支援）の強化が、今後の重要な課題として出ていました。



アイダさんと共に

シオネ支部会長が考える支部の方向性

パプアニューギニア赤十字社ブーゲンビル支部会長のシオネさんは昨年就任しました。

赤十字に関わるようになった理由についてこう話してくれました。

「ブーゲンビル危機の後、赤十字は地域全体で大きな役割を果たしました。

困難な時期に人々を支えていた姿を見て、自分もその一員になりたいと思いました。」

支部は紛争期に地域に入った組織の一つで、その経験が現在の活動の基盤になっています。

気候変動は今、支部の重要課題の一つです。特に離島や環礁地域は高潮や干ばつの影響を受けやすく、組織計画の中でも優先地域として位置づけられています。

「移動費や物流支援があれば、より多くの地域をカバーできます」

遠隔地支援の難しさと必要性が、率直に表れている言葉でした。



シオネさん



シオネさんと共に

2日間のモニタリング評価を通して

どちらの地域でも、課題の大きさより、続けようとしている人がいることが印象に残りました。ソハノ島では、海面上昇が生活の動線や衛生環境にまで影響している中、マングローブの植林や海岸の補強など、地域の人たちが工夫しながら対策を続けていました。ハク地区では、研修を通して、気候変動が自分たちの経験として語られ始めているのを感じました。しかしその一方で、活動の継続性など、現場には多くの課題もありました。

これまで、継続のしにくさは地域側の事情によるものだと、どこかで決めつけていたかもしれません。でも、IFRCパプアニューギニア国事務所の五十嵐所長から「なぜそうなるのか」という視点のコメントをもらって、捉え方が変わりました。事業計画の段階で情報収集とアセスメントを十分に行い、地域の状況に合った計画とフォローアップの仕組みを設計することが、継続を左右する要素の一つだと教わりました。

この2日間は、事業管理の重要性と難しさを、言葉ではなく実感として学べた経験でした。派遣期間は残りわずかですが、今回の気づきを活かして、今後の活動にもつなげていきたいと思っています。



育っているマングローブの苗



海岸沿いの住居



ロンダさんへインタビュー



マングローブ植樹エリア



ソハノ島の綺麗な海



地元のマーケットの様子